

海外事業のスペシャリスト 編

[登壇者] 近藤 滋

フェロー会員 電源開発(株)

通算30年以上にわたり、海外の発電事業に取り組まれている近藤滋さん。調査から設計・施工管理まで、さまざまな事業を経験した海外事業のプロフェッショナルである近藤さんに、土木の魅力とグローバルな技術者としての信念を伺った。

腕 明治維新の技術者に 憧れ

「中学時代は、バイクのエンジンをつくりたかった」。当時、ホンダなど日本のバイクメーカーが世界大会で優勝するなど、乗り物に興味があった近藤少年は、世界で活躍するバイクのメカニックに憧れていた。特に、雑誌に載っていたレース用エンジンの構造図に引きつけられバイクのエンジンをつくりたいと考え、中学生にして自作のエンジンを設計するほどであったという。この時、ものづくりは好きだったが土木には興味がなかったのだ。そんな近藤少年に転機が訪れる。高校時代に見た明治維新100周年記念で名も知れぬ米国鉄道技師を紹介したテレビ番組である。開拓精神を持って途上国のためにもものをつくる姿に感銘を受けるとともに、「サーキットで100分の1秒縮めることにどれほどの社会的な意義があるのか」と自分に問いかけた結果、自分も途上国の国づくりの仕事に携わりたいと考えるようになったそうだ。そして大学卒業後、現在の電源開発(株)に入社され、5年間国内の事業に携わったのち、現在に至る

腕 日本の常識は 世界の非常識?

「海外の事業で最も難しかったことまで30年以上にわたり海外事業に尽力されている。「発展途上国のために」、高校時代に抱いた思いを見失うことなく現在も実践し続ける近藤さん。「あきらめずにやり続けなければ必ず最後に結果が出るものだよ」。当たり前のようで実に深い言葉であると感じた。

「海外の事業で最も難しかったことは、工事を工程通りに進めることだった」と語る近藤さん。これには、日本と海外の技術者の、現場とのかかわり方の違いが大きく関係している。その一つが現場に行くか行かないかであるという。「インドの発注者はプロジェクトマネージャーを現場に常駐させていなかったからね」。現場主義である日本ではどう考えても考えられないことだ。「現場は日々変化し、現場にいるからこそ設計変更の判断ができる。こういった部分が海外でははつきりしていないことが大きな違いとなっている」と語る。また、海外の事業は契約関係で必ずしも悶着があるという。日本の請負工事では、基本的に

腕 世界に生きた証を 残せる土木技術者

「発注者と施工者の2者が互いに尊重しあいながら工事を実施するが、海外の請負工事では、技術判断および契約管理を行うエンジニアが加わり3者で実施し、時として契約紛争解決のために専門のコンサルタントが加わるそうだ。現場の管理だけでなく、人の管理、契約の管理も重要になってくる。「そういう意味では日本は恵まれすぎている。自分たちが恵まれているということを感じなければいけないね」。日本の事業では考えないことも海外では考えなければならぬ。海外で仕事をすることの難しさを強く感じた瞬間であった。

トルコでのロックフィルダムの施工管理やベトナムのタクモ水力発電所増設工事など多くの海外事業に携わってきた近藤さん。その中でも最も長い期間携わったのがインドのプリアア揚水発電事業だ。初めてインドを訪れたのは、1987年のインドエネルギーセクター調査であったという。「この施設で本当に効率よく発電を行えるのか?」。イン

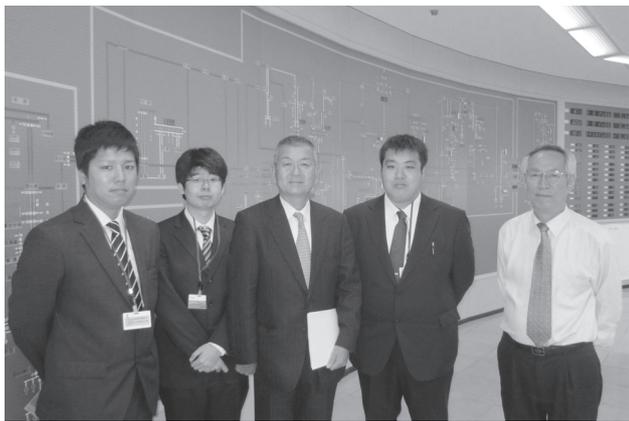


写真1 左から3番目が近藤さん。電源開発中央給電指令所にて

「インドの発電所を見た近藤さんの感想だ。当時のインドは、市場環境の問題から海外のコンサルタント業者が仕事を行うことがほとんどなかったという。つまり、インドの技術者は、海外の一般的な技術を知らないことを意味し、「インドは世界の技術をもっと吸収すれば成長できる」と感じたという。その2年後、早くも実現のチャンスが訪れた。プルリア揚水発電事業の計画が持ち上がり、約10年の調査、設計を経て1999年の入札の結果、オールジャパンでの事業が実現したのだ。「インドに目覚めてもらうチャンスかもしれない」。近藤さんたちは、当時のインドでは、工程通りに進んだ水力発電プロジェクトは皆無であつた現実を踏まえ、日本の技術力を示すためにも、品質を維持しながら工程通り進めることを目指した。やはり一番苦労したことは、資材の遅れなどのさまざまな問題発生による工程確保であった。その中で、近藤さんは「現場を知ること」の重要性を再認識したという。「工程を把握するだけでなく、自らの目で日々変わる現場を見ることにより、必要なもの unnecessaryなものを判断するスキルを身に付けた」と語る。常に現場を把握することが、土木工事において重要であることを実感した。そしてさまざまな苦労の末、契約通り60ヶ月という短期間で土木工事を完了させる

こんどう・しげるさん

1950年、東京生まれ。埼玉大学理工学部建設基礎工学科卒業後、電源開発(株)入社。水力建設部設計室、建設部工事課を経て、海外技術協力部へ異動。その後、国際事業部へ異動し、海外事業へ尽力。62歳。

ことに成功した。インドへ日本の技術力を示した瞬間である。「世界に日本人として生きた証を残せる、まさに土木、海外で仕事をするこの魅力だね」と語られた。

腕 視野を広げる 経験をしる

さまざまな国へ赴き仕事をこなす近藤さんは、若手社員に対し「機会があるなら土木以外の勉強もしてみろ」とアドバイスをしているという。インドで初めての仕事は、海外経済協力基金(現JICA)へ出向した時に携わったインドのエネルギーセクターを調べる仕事であった。そこで、土木屋としてではなく経済屋として2年間を過ごしたそうだ。「初めての経験ばかりであったが、視野を広げるいい経験となった」。土木とは総合工学であり、土木技術者とはジェネラリストであるというのが近藤さんの考えだ。特に、現場だけでなく、人や契約など多くの能力が必要である海外の事業では、土木以外の知識も必要となる。まさに海外に主戦を置く技術者のあり方を感じた。

腕 取材を終えて

これからの夢はという問いに「チャンス

があるならもう一度施工管理にチャレンジしたいね」と語る。また、「私はスゴ腕技術者じゃないよ」と続けた。人生の半分以上を海外事業に尽力されている現在でも、向上心を忘れることはない。「常に前を見て歩み続ける！」近藤さんの持つ理念こそわれわれ技術者を指す学生が見習うべき姿なのかもしれない。今回の取材を通して、海外での仕事の難しさや土木技術者のあり方を学ぶことができた。「海外に挑む」土木技術者として成長するための一つのプロセスなのかもしれない。

元学生編集委員 水野雄一、辻本剛士
学生編集委員 相沢圭俊

今月のスゴ腕 技術者からの一言

学生へのメッセージ—海外を目指す人びとへ

海外で仕事をする際、「仕事をしてあげている」のではなく、「仕事をやらせてもらっている」ということを忘れないで欲しい。先進国は高度な技術を保有しているからといって途上国を軽んじるのではなく、敬意を持って取り組まなければならない。また、厳しい環境だからこそ技術者として成長するきっかけがたくさんあるはず。最後に、難しい場面に出くわしても安易な方法に逃げないでほしい。絶対にあきらめなければ必ず道は見つかるはずだ。